

古代の宮都の移転と河川

誌名	水利科学
ISSN	00394858
著者	松浦, 茂樹
巻/号	211号
掲載ページ	p. 41-63
発行年月	1993年6月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



古代の宮都の移転と河川

——長岡京、平安京への遷都を中心に——

松 浦 茂 樹

1. はじめに

古代の河川処理として歴史書に明記されて著名なものは、和気清麻呂による大和川附替の試みである。時は延暦7年(788)で、河内・摂津の両国の境、現在の大阪市阿倍野区から上野台地を掘り割って大和川の水を大阪湾に抜こうとした。この開削には失敗したが、それに3年先立つ延暦4年、都から使が遣わされて淀川筋の摂津国津屋(吹田市)で新川が掘られた。三国川(現在の神崎川筋)への開削であり、『続日本紀』正月十四日の条に「使を遣わして、摂津国の神下、梓江、^{あじふの}鱈生野を掘りて、三国川に通ぜしむ」とある。これには成功して、ここからも淀川の水は大阪湾へ分流することとなった(図1, 図2)。

開削区域はいまの神崎川の流頭で、台地を掘り割る大和川附替と比べて掘削量は少なく、工事は比較的容易である。なおこの時、清麻呂は摂津職の長官である摂津大夫の職に延暦2年3月からあり、この開削と深く関わっていたと思われる。

この延暦年間、宮都を平城京から長岡京(延暦3年)、長岡京から平安京(延暦12年)へと移した時代である。この遷都を河川からみると、それまでの大和川筋から淀川本川筋への移動である。そして長岡京への遷都は「水陸便あって、都を長岡に建つ」とあるように、水陸の便を求めてであった。長岡京への遷都の時、清麻呂は摂津大夫として協力しているが、長岡京から平安京への遷都は『日本後記』が記すところによると、桓武天皇に清麻呂が提唱して行われたといわれている。さらに清麻呂は、延暦13年、造宮大夫(長官)として平安京造都に深く関わった。

本報文は、長岡京、平安京遷都について、河川との関わりで論じていく。な

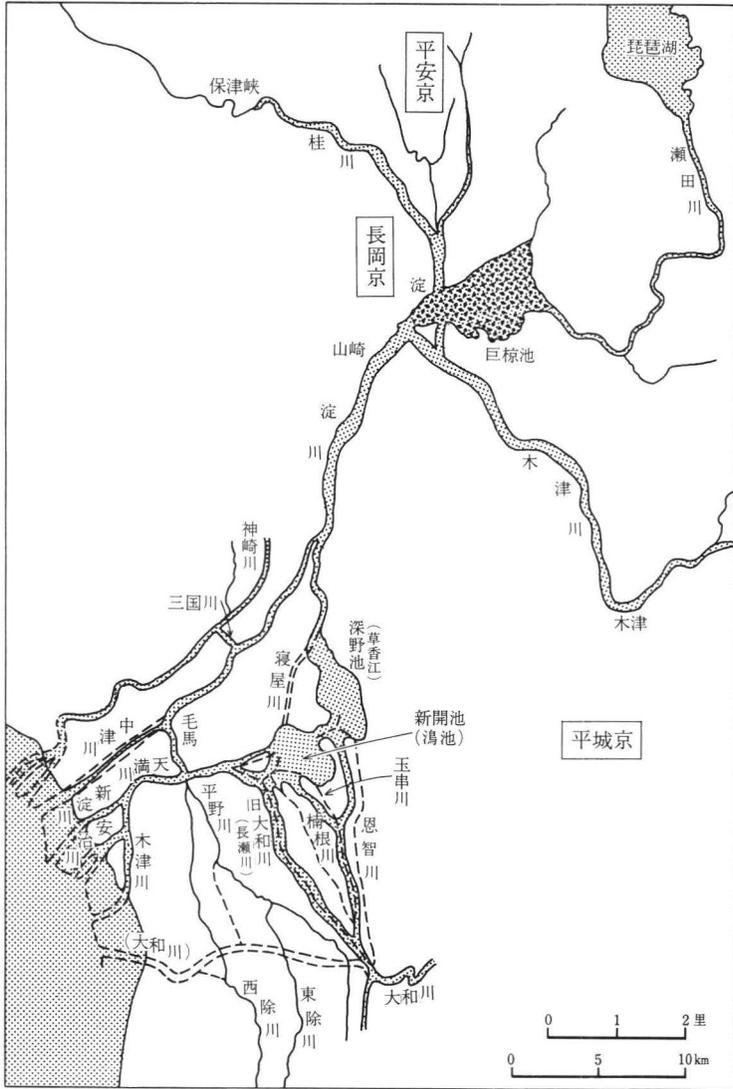


図1 淀川概況図

出典：小出博『利根川と淀川』中央公論社 1975年 p. 17をもとに作成

2. 淀川の特徴

わが国で7番目の大きさである8,250 km²の流域面積をもつ淀川は、わが国では他に例を見ない特異な河川である。それは、上流部に約275億 m³と、わが国第一の大湖沼である琵琶湖を抱えることである。琵琶湖の流域面積は淀川流域の約42%を占め、琵琶湖からの流出河川は狭い瀬田川のみである。瀬田川は、京都盆地に入ると宇治川と名を変えるが、盆地の最下流部で流域面積1,160 km²の桂川、1,596 km²の木津川と合流する。この後、淀川となって八幡と山崎間の狭窄部を通して大阪へ流れ出していくが、この三川合流点付近に巨椋池などの大きな沼や池があった。宇治川、木津川、桂川はこの巨椋池に流入していた(図3)。なお、地質構造によって自然に生まれたこれらの沼・池が干拓により消滅するのは、昭和に入ってからである。

このように上流部、中流部に琵琶湖、巨椋池などの大湖沼をもつこの状況は、流水が自然調節されて、洪水からみると、下流の大阪にとってそのピークの大きさを著しく緩和する。一方、低水よりみると、琵琶湖からは決して枯れることのない豊かな水が流れ、河川舟運にとって格好の条件となる。

このような淀川の姿の中で、長岡京は巨椋池の西に隣接する地域に造営されたのである。

3. 平城京から長岡京へ、そして平安京遷都

長岡京への遷都は、淀川に架かる山崎橋の建設から始まる。『続日本紀』に記述されているように、延暦3年7月、「阿波、讃岐、伊予の三国に仰せて、山崎の橋の材を進むしむ」て行われたのである。宮都の中心である大極殿、朝堂院、内裏等の重要な建築物は丘陵地の前面にある段丘上に造られ、淀川洪水からは安全であった。しかし、下級役人、庶民が生活する区域は、図4にみるように氾濫原にも拡がっていた。特に左京区は桂川に接しており、その脅威は大きかった。

さて長岡京への遷都であるが、「朕、水陸の便を以て、都を此の邑に遷す」と延暦6年(787)、天皇が詔で述べているように²⁾、長岡の地が水陸両方から交通の便の良かったことがその理由であった。このうち陸についてみると、宮都が平城京に置かれてから、山陽道、東海道も奈良丘陵を通過して北方の山背から大和に入るようになった。平城京遷都の翌年の和銅4年(711)に、北回り

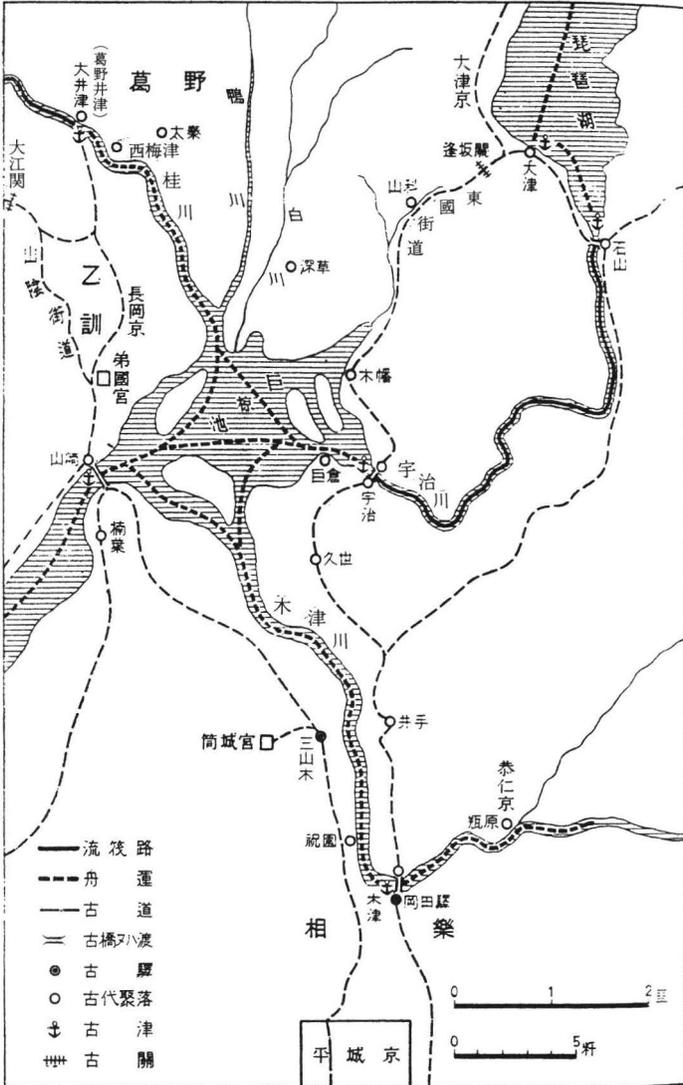


図3 古代の巨椋池周辺と水陸交通図

出典：『巨椋池干拓史』巨椋池土地改良区 昭和37年 p. 199に加筆

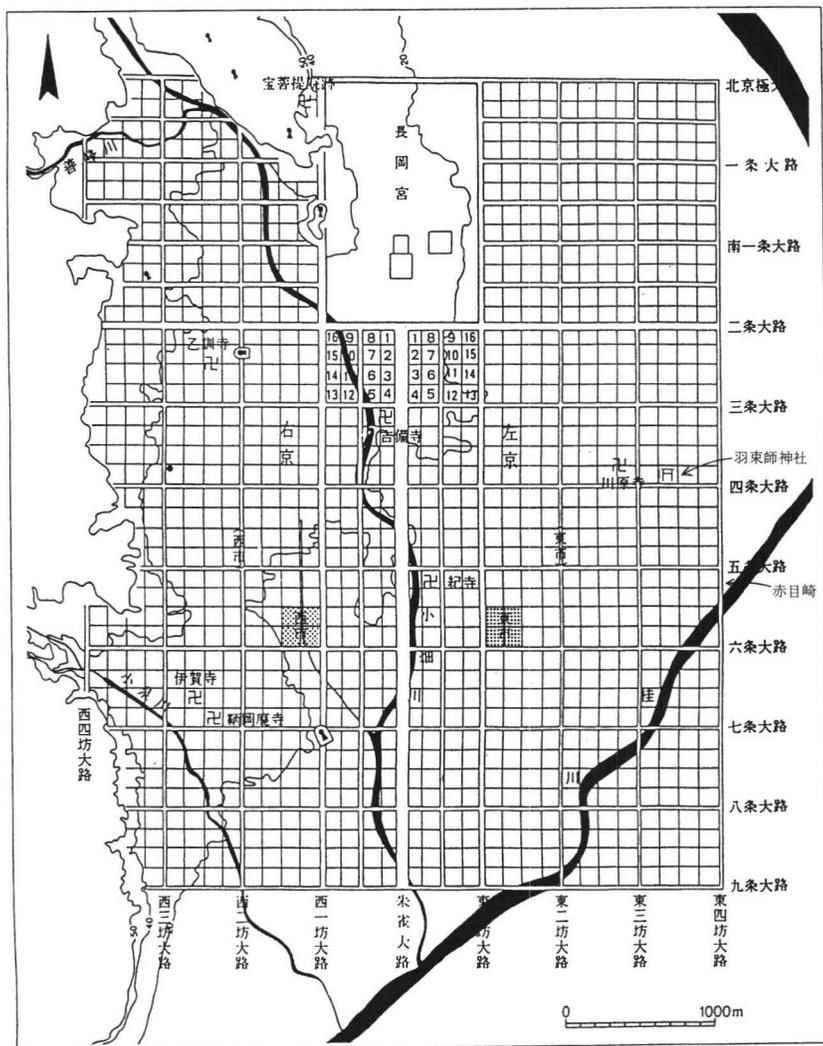


図4 長岡京条坊復原図

出典：「長岡京跡」乙訓文化財事務連絡協議会編 1984年に加筆

の道路が整備されたと考えられている³⁾。それまでは山陽道は竹内峠を通して難波から大和に入り、東海道は大和高原を横切って東へ向かっていた。この後、東海道は大和から山背に出て木津川沿いに伊賀へ行くようになったのである。

一方、山陽道そして丹波に向かう山陰道を見ると、山背と摂津のほぼ国境にあって長岡京の至近の位置にある山崎で淀川を渡って、西へ行った。このため山崎には古くから橋が架けられていたが、これは神亀2年(725)、行基によって造られたものという。これが伝説によるにせよ、北回りに山陽道が整備された和銅4年から遠くない時に架けられたのだろう。山崎から大和へのこのような街道が整備されてから、淀川舟運を利用して大和へ向かう物資の集散地が山崎周辺に置かれたのは間違いなく、一部はここからさらに木津川を遡って木津まで舟でいった。まさに山崎周辺は交通の要衝であった。

ところで長岡京周辺を桂川との関係でみると、その左京区は桂川の氾濫原であるとともに灌漑区域であった。明治25年(1892)に発行された大日本陸地測量部による2万分の1の図面をみると、桂川は保津峡を下って京都盆地に出るが、盆地の上流部の西梅津地点で用水が取水され、長岡京の左京区まで灌漑されているのである。この西梅津の直上流の松尾付近には、古代に秦氏によって堰が築かれた。「葛野大堰」であるが、「秦氏本系帳」には「葛野に大堰を造る、天下に於て誰か比検する有らんか」とあって五世紀頃の築造と考えられている⁴⁾。その功労にちなんで秦氏の祖は秦はたのかわかづ河勝と名付けられたという。この堰からの取水は、室町時代の絵図によると下流に移り、11郷をうるおす用水となっていた⁵⁾。つまり明治前期の図面とほぼ同じ状況になっていたと考えられる。

このように1,000 km²をこえる流域面積をもつ大河川桂川で古代から用水開発が行われていたのであり、桂川右岸の開発年代は古い。果たして、この開発は、長岡京区内のどのあたりまで行われていたのか興味あるところである。

長岡京左京区の氾濫原に羽束師神社があるが、この神社は桂川の自然堤防上にあり、築造年代は雄略朝と伝えられている。またその当時の巨輪池の水位は低く、標高9.3 mから9.5 mの間で、最も低地部に位置する長岡京に関する居住関係の遺構が発見されている⁶⁾。これより長岡京区域のかなりの範囲にわたって農業開発が進められていた可能性が高い。このことから、長岡京への遷都は、水陸の交通の要衝であるとともに、古くから開発が進行していた地域への進出であったと考えられる。

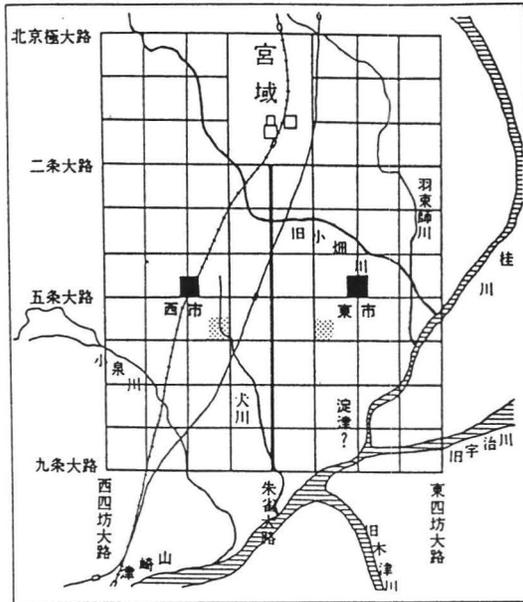


図5 長岡京概況図

出典：「長岡京跡」乙訓文化財事務連絡協議会 1984年

さて長岡京区内の中小河川で興味深い河川は、流域面積 34.2 km^2 の小畑川である。先の図4では、現況のように平地部に出てから段丘に沿ってほぼ南北の方向を走っている。しかし、この方向は地形条件からみて不自然であることが報告されている⁷⁾。一方、昭和59年（1984）に印刷された長岡京市教育委員会発行の図面で見ると、旧小畑川が平地部に出たところで南北方向から東西方向に直角に曲流している。長岡京の時代、これが小畑川の流路であるとしたら、市との関係も含め、図5のように推定されている。なおこの東西方向の旧流路跡は、地表景観からも認められている⁸⁾。

ところで小畑川は、小さいながらも平地部に扇状地が発達しており、南北、東西方向の現・旧流路もこの扇状地上にある。このため、それぞれの流路が自然に流れていたという可能性もある。しかし、旧流路は、南北から東西と余りにも急激に曲流しているため不自然である。現地形をみると、東南から東南東への方向に傾いている。これらの状況から、ほぼ南北に流れる現在の流路も、

かつ旧流路の東西方向も、人工的に整備された流路方向であると判断している。ちなみに大和盆地内の河川が古代に条里制に従って東西・南北に人工的に曲流されていたことは、筆者が既に報告している⁹⁾。

では長岡京設置の時代はどの方向に流れていたのだろうか。筆者は図5のように東西の方向に流れていたと考えたい。その目的は、東市への物資の輸送もあるが、宮殿建設のための資材の運送の目的も大きかったと考えている。長岡京の宮殿はかなりのものを難波京、平城京の資材を使ったことが明らかになっているが¹⁰⁾、特に淀川最下流部にあった難波京はこの時廃止となって、主要な建物は長岡京へ移転された。その運搬路として小畑川が整備されたと考えている。小畑川は、流域面積34.2 km²の小河川であるため通常時の水量は少ない。安定した運搬路として利用するためには勾配を緩くし、水深を確保する必要がある。このため勾配を緩くできるよう上流で桂川につなげたと考えている。また人工的な河川処理は、小畑川の流域面積の大きさから古代の技術でも行い得たと考えている。

それではこのようにして整備し、また本格的な宮都としてかなりの建設が進んでいた長岡京を、何故わずか10ヵ年の短命で放棄し、平安京へ遷都したのだろうか。その有力な説として、桓武天皇のさしがねにより延暦4年憤死させられた彼の弟・早良親王の怨霊の恐れとともに、長岡京が水害に見舞われたことがあげられている。

この水害説は、小林清氏によって唱えられた。小林氏は長岡京の近傍に死者を葬ることの禁制発令は延暦11年8月にあったので、この時までは廃止する考えはなかったことを述べた後、怨霊廃都説の批判として次のように述べている¹¹⁾。

長岡京廃都の頃に早良親王怨霊が問題となったことは確かであるが、そのために行った対策をみれば宮都の建設を行わねばならない大問題に比べると微々たるものであった。また早良親王の怨霊が重大問題となり、崇道天皇の追号等の本格的な対策を行ったのは平安京に入った後、5年から10年以上たってであった。廃都後の長岡京の跡地の利用状況をみると、皇親、寵臣など桓武天皇にとって重要な人物に次々と賜われており、決して長岡京の地は怨霊の祟りに満ちた不吉の土地ではなかったと怨霊説を否定する。

一方、宮都の移転には莫大な国費を必要とするし、また数千人いたといわれる官人、市人庶民は自らの責任で住宅を建てねばならない。この費用は特に大

変なことで、個々人にとってまことに重要である。10年もたたずに再び移転するとなると、官人たちの負担は大きなものとなり、不平・不満は大変なことであつたろう。ところが平安京造営にはこれまで以上に官人達の協力が得られ、スムーズな遷都が行われた。そのためには怨霊廃都説のような天皇個人の精神的な悩みから逃れるためではなく、官人達が十分納得できる理由があつたからだと考えられる。また、長岡京は藤原京、平城京とは違った新しい形式が取りあげられているが、その型式はほとんど平安京に取り入れられており、長岡京が怨霊にみちた縁起の悪い宮都とは考えられていなかった、等々。そして、小林氏が提出された廃都の理由は、延暦11年の水害である。

この年、長岡京では2度にわたって水害に襲われている。6月21日には「雷雨、潦水滂沱、式部省南門為之倒仆」と『日本紀略』に述べられているように、式部省南門が倒れた。小林氏はこの時の出水を、大雷雨等による集中豪雨で小畑川が氾濫したものと考えている。この出水の1ヵ月半後の8月9日、長岡京は再び水害を受け、天皇は葛野川畔赤目崎に行き被害状況を視察した。『日本記略』には8月9日に「葛野川溢れる」の記述があり、また2日後には「赤目崎に幸し洪水を覽る」と述べられている。この時の出水は、葛野川（桂川）であつた。

小林氏は、天皇が被災地を親しく視察したのは摂政官が視察した関東大地震以外なかったことをあげ、この水害が如何に大きかったことかを指摘する。そして小林氏によると、葛野川の治水のためには葛野川に沿って15 km 以上の堤防を築かねばならない。また、小畑川が長岡京の中央部を横切るのを止めて南北に流れを変えるのは、大変な費用と労力がかかり、河川工事に経験のある和氣清麻呂の進言によって平安京への再造営を決定したのだらうと推測している。なお小林氏は、図5のように小畑川が東西方向に流れていたことを前提としている。

洪水によって大きな被害を受け、この結果、平安京へ移っていったという小林氏の説に筆者は基本的に賛成する。舟運の便を目的に自然地形に反して付け替えられた小畑川は、出水には弱かつただらう。大きく曲流させた付近で決壊したものと考えられる。また、8月の出水は大河川葛野川が氾濫したのであり、この結果、翌延暦12年の平安京への遷都となつたのである。

では『日本略紀』に「葛野川溢れる」と記され、遷都のきっかけとなつた延暦11年8月の洪水とはどのようなものだったらうか。わが国の河川が氾濫する

時、洪水は用水路等に整備されている旧水路を走る場合が多い。葛野川も先述したように京都盆地の入口で取水され、用水路は長岡京左京区まで導水されていたと思われる。その用水路に沿って洪水が走り、長岡京を北部から襲ったという可能性は十分考えられる。あるいはわが国の河川の特性を考えると、このように解釈するのが最も妥当かもしれない。しかし筆者は、葛野川の特性からみて、葛野川が流入している巨椋池の水位が上昇し、長岡京の東部あるいは南部から水が襲ってきたのではないかと考えている。なお巨椋池の氾濫という説については、吉崎伸氏も巨椋池の歴史的な水位の検討から指摘しているが¹²⁾、河川工学の立場からさらに考えてみよう。

先述したように桂川、宇治川、木津川の洪水は巨椋池に流入し、その後、八幡、山崎の間の狭窄部を通して流下していく。つまり、下流にとっては遊水池となっている。さて葛野川について考えると、京都盆地に入るには長さ約10 kmにわたる保津峡を通らねばならない。この保津峡によって洪水は一定量に絞られ、上流の大洪水が一気に襲うということはない。ただしこの長い狭窄部のため、その上流には大氾濫地帯が出現する。そこは亀岡盆地の下流部であるが、たとえば桂川の最も近年の大出水であった昭和35年（1960）8月の豪雨でも、この状況は見られた。保津峡は近世初頭の角倉了以による岩石除去など、舟運のための度々の整備によって疏通能力は増大したが、それ以前の古代での洪水の絞りこみ効果は大きかったと考えている。

保津峡を下った京都盆地では、このようにこの狭窄効果により一気の濁流には襲われない。このことが、桂川のような大河川でありながら、古代に堰が設置され用水路が整備された重要な自然条件だと考えている。上流で大遊水した洪水に対してはそれ程大きくない堤防で防御できるのであり、長岡京造営の当時もしかるべき施設はあったものと考えられる。またそれなりの対応はできたものと考えている。

しかし、上流で大遊水しても減少するのは洪水のピーク流量であって、洪水のボリュームは同等である。時間をずらして洪水は流下してくる。その流入先が巨椋池である。宇治川、木津川からの出水も合わせ巨椋池の水位が上昇したら、長岡京左京区は著しい脅威を受ける。ひとたび氾濫した水はなかなか抜けず、その回復にはかなりの月日を要したと思われる。長期間の湛水により発生したであろう疫病をみて、桓武が早良親王の祟りと恐れ、洪水から安全な地へ宮都を移したとの理由は十分成り立つと考えている。

河川からみて長岡京の状況は、以前の宮都である平城京、約10年後に移っていく平安京と全く異にする。平城京は扇状地的地形である大和盆地の北部に位置し、宮都の中を中小河川である佐保川・堀川が流れていて、洪水の脅威はほとんどない。平安京は鴨川の東部に位置し、鴨川扇状地上に展開した都市である。後に白河法皇が「三不如意」として、賽の目、叡山の僧兵とともに鴨川の洪水をあげ、鴨川から氾濫の脅威があったことを伝えているが、鴨川の流域面積は約208 km²で中小河川である。このため氾濫があっても、その被害はそれ程ではない。木津川、宇治川、桂川の大河川が流入する巨椋池に隣接した長岡京とは基本的に異なるのである。

長岡京では巨椋池が氾濫し、その水が襲ってくるならば、洪水の脅威は平城京、平安京との比ではない。平安京はたとえ鴨川が氾濫しても、扇状地であるため水は容易に引く。一方、長岡京の低地部ではその地形条件より水の引くのが遅く、このため伝染病などが発生してその被害は深刻となる。古代の技術で防禦するのは、到底不可能なことと判断される。

ところで長岡京の時代に行われた三国川開削と大和川附替は、長岡京造営と直接的な関係はなかったのだろうか。たとえば『新修大阪市史』（大阪市、昭和63年）では、西国から長岡京への各種の貢納物輸送のための淀川舟運整備を目的として、三国川疏通は行われたと述べている¹³⁾。

事実、それまで難波の堀江（現在の大川筋）、その周辺の難波津を經由していた瀬戸内海沿いの物資は、三国川経由で淀川を遡り、直接、山崎あるいは淀の港で陸上げされた。後年の平安京の時代には、三国川流頭部の江口、河口部の河尻が大いに栄え、特に江口には多数の遊女がいて、天下第一の楽地といわれた。しかし筆者は、結果的にこうなったのであって、その第一の目的は、淀川、大和川が合流し河内湖あるいは草香江と呼ばれた大湖沼のある大阪平野の治水と耕地開発ではなかったかと考えている。

理由の第一は、和気清麻呂が三国川疏通直後の延暦7年（788）から始めた大和川放水路工事との関連である。清麻呂の大和川開削の目的は治水、それに基づき開墾であり、『続日本紀』は、次のように述べている。

「河内・摂津の両国の堺に、川を掘り堤を築き、荒陵の南より河内川を導き、西のかた海に通ぜむ。然らばすなわち沃壤ますます広くして、以て墾闢すべし。」

また『日本後紀』は延暦18年2月21日の条に「清麻呂、摂津大夫として河内

川を鑿ち、直ちに西海に通じ、水害を除かんと擬す」と記述していて、舟運については何らふれられていない。

この工事の背景には、8世紀後半の淀川・大和川下流部での打ち続く水害があった。天平勝宝2年(750)、天平宝字6年(782)、宝亀元年(770)、宝亀3年(772)、延暦3年、4年と続く。それぞれの洪水について『続日本紀』には次のように述べられている¹⁴⁾。

①天平勝宝二年(750)五月二十四日の条

京中驟雨ふって水潦汎溢す。また伎人・茨田^{まんた}等の堤、往々にして決壊す。

②天平宝字六年(762)六月二十一日の条

河内国の長瀬堤決く。単功二万二千二百余人を発して修造せしむ。

③宝亀元年(770)七月二十二日の条

志紀・渋川・茨田等の堤を修む。単功三万余人。

④宝亀三年八月の条

是月、朔日より雨ふり、加るに大風を以てす。河内国の茨田堤六処、渋川堤十一処、志紀郡の五処、並に決く。

⑤延暦三年(784)閏九月十日の条

河内国茨田郡の堤、決くること十五処。単功六万四千人に糧を給して之を築かしむ。

⑥延暦四年九月十日の条

河内国言す。洪水汎溢し、百姓漂蕩す。或は舟に乗り、或は堤上に寓す。糧食絶乏して、艱苦まことに深しと。是に於て、使を遣はして監巡せしめ、兼て賑給を加ふ。

⑦延暦四年十月二十七日の条

河内国、堤防破壊すること卅処。単功卅万七千余人、糧を給してこれを修築せしむ。

これにより、特に延暦4年の被害の大きいことがわかる。延暦4年正月に行われた三国川開削は、その前年に決壊した茨田堤の対岸にあたっており、その水害に対処したものと思われる。しかしこの工事のみでは不十分で、延暦4年の大水害後、その延長線上に大和川附替は行われたと考えられるのである。すなわち、淀川、大和川下流部は、両川より排出される土砂の堆積地を中心に開発が進展していったと推定されるが、この両川の下流部で、この当時、水害が多発していた。このため三国川への疏通、大和川の開削工事が、摂津大夫・和

気清麻呂を中心に一体となって進められたものと判断される。

第二の理由は、それまで瀬戸内海と淀川・大和川をつなぐ水路、難波の堀江に、特にこの時、支障が生じていたとは思われぬからである。支障が生じていなかったら積極的に新舟運路を整備する必要性は見出し得ない。特に難波津は、西の長門とともに瀬戸内舟運の監視を行う重要な関が置かれていた。関としての役割は、船が通らなくなったため、三国川疏通から4年後の延暦8年(789)に機能を停止させられている。つまり三国川疏通直後ではなく、舟運の移動がはっきりした4年後に停止させられたのであり、結果としての事実の追認と思われる。

ところで堀江の支障として、天平宝字5年(761)、遣唐使の船三艘のうち一艘が堀江に入る河口部で坐礁破裂したことをとらえ、この当時、難波の堀江の周辺に土砂が堆積し、航路に支障が生じていたとの説がある¹⁶⁾。これらの土砂は大阪湾の沿岸流で運ばれたものが中心と思われるが、この堆積物が流水の疏通に支障を生じさせ、これが8世紀後半に水害が多発した理由であると展開されている。

しかし、三国川疏通後も外国貿易船等の大型の舟はここを遡ることができず、難波津を利用している。例えば博多からの船は玄海灘を通らねばならないため大型であったが、三国川をそのまま遡ることはできず、難波津を利用していた。このことからみても難波の堀江経由の舟運の特別の支障は見出し得ない。また支障が生じていたのなら、当時の舟運の役割の大きさからして、清麻呂の大和川放水路計画の中に、新たな舟運路整備が目的として当然入っていると考えべきではなからうか。なお難波の堀江は、図2でみるように海成砂州である天満砂堆をその根本のところ横切っている。『記紀』の仁徳紀には仁徳天皇が掘ったと記されているが、この時代に掘ったかどうかは別にしても、古い時代に人工的に整備されたのだろう。

後の9世紀の中頃になって、この難波の堀江の流水疏通に大きな支障が生じたことが知られている¹⁷⁾。承和12年(845)、大和川の治水のため難波堀江に生じている草木を芟る工事が行われた。草木が生えるぐらいであるから土砂の堆積も生じていたのだろうが、この状況になったのは三国川疏通が大きな理由だったと思われる。つまり河口の維持には、大貯水池琵琶湖を抱える淀川流水の疏通、それによる土砂の掃流が重要な役割を有していた。しかし、三国川が疏通したことにより難波堀江への流水はかなり減少したことは間違いなく、当

然、掃流力は減少し、その結果、ここでの土砂堆積が進行したのである。

さてここで延暦4年の三国川開削と延暦7年に着手された大和川開削について、長岡京造営との関係で考えてみよう。先述したようにこれらの河川工事は大阪平野の治水と開発を重要な目的としていた。この当時、堤防は茨田堤などで一部には施されていたが、それは一部地域を守る輪中堤であったり山付け堤などであって、淀川は自然のまま悠然と流れていたと思われる。しかし土砂の堆積が次第に進み、そこを目指して本格的な開墾の試みがなされ、この治水を目的として河道開削が試みられた。さらにこの開墾は長岡京に接している巨椋池も対象にしていたのではないかと推測している。

現代の河川工学から判断すると、三国川、大和川を開削しても巨椋池にその効果は及ばないことは当然のことと思われる。しかし古代では、巨椋池にも及ぶものと判断していたものと考えられるのである。当時あってはこれは決して無謀な試みであったとは思わない。近世になっても天明7年(1787)には、島根県にある宍道湖の水を中海を通さずに日本海に抜こうとして佐陀川が開削された。また幕末から明治の初頭にかけて、霞ヶ浦の開墾を目指して鹿島灘へ向けて居切り堀が開削された。どちらも湖沼の水位を低下させることなく、失敗に終わっている。

この経験からみれば、古代の発想が当時の科学水準からみて、無謀な試みだとは思われない。強い期待をもって行われたと考えられる。つまり長岡京造営と清麻呂による河川工事は、一体となって推し進められたものと評価している。

『日本後記』の延暦18年(799)2月の和氣清麻呂伝の薨去伝に、次のことが述べられている。

「長岡新都。経十載。未成功。費不可勝計。清麻呂潜奏。命上託遊獵相葛野地。更遷上都。清麻呂為摂津大夫。鑿河内川。直通西海。擬除水害。所費巨多。功遂不成。云々」

このように長岡京造営が10年経ても成功せず、平安京への遷都を清麻呂が潜かに奏したことと、大和川開削に失敗したことが並列的に述べられている。このことからみても、これらは密接に関連して行われたと考えるべきではなかろうか。一方では造都が行われ、一方では古代を代表する大河川工事が行われている。全く関係なしとするのが不自然であると思われる。大和川開削工事には

23万人の労働力が動員されているが、一方、造都にも大量の労働力が必要で、たとえば延暦4年には諸国より31万4,000人の動員が行われた。全国からのこのような大量の動員は、河川工事と造都の両方を進めることを目的にしていたと判断されるのである。

しかし、延暦7年から始まった大和川開削は容易に成功しなかった。三国川開削と比べ、上町台地を突っ切るなのでその土木工事量は膨大である。その途中で長岡京は大水害に見舞われた。長岡京の治水をも重要な目的として行っていた大和川開削の見込みもたない。これが長岡京放棄、平安京への移転の理由であったと考えるのである。

4. 宮都の位置と河川舟運

藤原京、平城京があった大和川筋と、それが移動した淀川筋について舟運を中心とした交通体系から考えてみよう。以前、報告したように¹⁸⁾大和盆地は決して閉鎖的な地ではなく、木津川、紀の川とも身近につながっていた。しかし、その主軸は大和川であり、難波京を外港とし、難波の堀江を通して瀬戸内海とつながっていた。一方、京都盆地は、淀川を下っていけば三国川経由で大阪湾に達し、瀬戸内海に出る。上流に琵琶湖を抱えていて水量豊富な淀川では瀬戸内海を渡航してきた船がそのまま遡れる利点があるとはいえ、瀬戸内海への方向は、大和川と同様である。ただしこの利点は重要であり、淀川の有利性として無視し得ないことは間違いない。

しかし、淀川はそれ以上にさらに重要な利点をもっていた。それは、上流の琵琶湖の存在であり、琵琶湖の北岸からわずかな距離を置いて日本海へ出るのである。そして日本海を通じて西は山陰、北九州、東は北陸、東北、北方は大陸とつながるのである。つまり琵琶湖をその傘下に収めれば瀬戸内海から九州方面のみならず、日本海をも身近に置くことができるのである。琵琶湖北岸と日本海との連絡を見れば、延喜式に記載されている敦賀・塩津ルートをはじめ、敦賀・海津、小浜・今津を主要ルートとし、琵琶湖と若狭湾とは密接につながっていた(図6)。

『日本書紀』には、神功皇后が九州に赴くとき敦賀から日本海を西航したと記されていて、敦賀からの海運ルートが古くから開けていることを暗示している。また源平合戦の際、京都を逃れ、一の谷合戦で瀬戸内に追われた平家が京都との連絡を得ようとしたルートの一つが、若狭湾からの通路であった。さら

に後年、戦乱が収まった近世初頭、北陸、東北の諸藩は、このルートを通して上方へ米等の物資を輸送し、このルートは最盛期を迎えた。しかし、河村瑞賢により寛文12年（1672）、下関を回って瀬戸内海に入り大阪に行く西廻り航路が開発されるに及んで衰退していったのである。その後、このルート沿いでは挽回を図り、敦賀と琵琶湖を結ぶ運河計画が何度も図られ一部では着工もされたが、成功しなかった。この敦賀運河は、平清盛も構想していたといわれる。

さて琵琶湖を経由しての日本海との連絡についてみれば、長岡京より平安京の位置がさらに有利であることは容易にわかるであろう。山城盆地の最も北部に位置し、一山越るとそこは琵琶湖で天津に出る。そしてこの地には、

天智天皇の宮都が置かれていた。その期間は天智6年（667）から、壬申の乱で勝利した天武天皇が都を飛鳥浄御原宮に置いた673年までであった。

平安京にとって天津が特に重要な地位を占めていたことは、後年、関東で猛威をふるい新皇と自らを称していた平将門について述べる「将門記」の次の記事からよくわかる。将門は自らの本拠地を次のように構想していた¹⁹⁾。

「王城ヲ下総国ノ亭南^{ていなん}ニ建ツベシ。兼ネテ^{うきはし}檣橋ヲ以テ、号シテ京ノ山崎トナシ、相馬ノ郡大井ノ津ヲ以テ、号シテ京ノ天津トセム」

下総国の亭南とは、茨城県猿島郡に位置すると想定されているが、檣橋を「京ノ山崎」、大井津を「京ノ天津」に例えているのである。山崎とは先程も述べたように宇治川、桂川、木津川が合流した直下流にあり、京にとって淀津とともに淀川舟運の玄関口である。瀬戸内海、淀川を遡ってきた物資はここから陸送されて平安京に運びこまれた。

このように山崎と並んで天津は、平安京の外港であったのである。平安京も



図6 琵琶湖と日本海関係図

しくは京都そして商業都大阪にとって、大津は極めて重要であり、江戸時代の初め、西廻り航路が開発されるまでは中継地として、幕府および北陸・東北諸国の倉庫が立ち並んで賑わった。

このようにみると都が大和盆地を離れ、山城盆地に出、再びその北部に再移動したのは、国土経営の観点からいって琵琶湖を通じて日本海をより直接的にその配下に収めようとしたのだと考えられないだろうか。事実、平安京に遷都した一ヵ月後、桓武天皇は、当時、古津と呼ばれていたこの地を大津と改称した。その理由として、桓武の父の光仁天皇の代から皇位はそれまでの天武系から天智系へ移ったが、天智のひ孫にあたる桓武が天智を慕って昔の名前に復したといわれている²⁰。しかしそのみならず、大津が物資輸送の中継基地として平安京にとっての重要拠点として強く認識されていた反映と思われる。なお桓武天皇の祖父つまり天智の皇子は施基皇子だが、その母は越の豪族である。つまり桓武は日本海に面している越の血筋を引いている。

ではどうしてこの時、桓武天皇は日本海を直接的に身近に置こうとしたのであろうか。桓武が天応元年（781）に即位して以来、推進した政策は遷都と共に東北経営すなわち蝦夷征伐であった。長岡京そして平安京を造営する一方、陸奥では激しい戦闘が展開されていた。戦闘は北上川流域、なかでも北上川中・下流部を中心に行われていたが、長年、苦戦したあげく、延暦11年、大伴弟麻呂を征夷大使、坂上田村麻呂を征夷副使として第二次討伐軍を派遣し、北上川沿いでの戦闘で敵に大打撃を与えたのは延暦13年であった。

この二方面の政策は全く無関係に行われたのであろうか。つまり日本海を身近に置くことと、東北の兵乱との関係である。しかし『続日本紀』、『日本紀略』等の歴史書が示すところによれば、軍役として東北に動員された兵士は関東を中心とした東国であり、革甲などの戦闘具、兵糧なども東国で準備するよう勅が下されている。たとえば延暦9年には、革甲二千領を駿河以東の東海道、信濃以東の東山道で三ヵ年以内に作り終えること、相模以東の東海道、上野以東の東山道諸国で軍糧を準備することが命じられている。一方、造都のために集められた人々は西国からであった。

こうしてみると、少なくとも畿内から西には、東北経営に対して直接的には課役は見あたらず、東国のみでの戦役と思われる。しかし東北兵乱の影響は東北地方のみに限定されていたのではなく、「坂東の安危此一挙に在り」と、その敗戦は関東の安全にまで響くと認識されていた程の国家存亡の大戦争であ

る²¹⁾。歴史書が示すとおり西日本と全く無関係で進行したとは信じがたい気がする。仮に税として都に運びこまれた物資、さらに革甲、兵糧米など畿内以西の物資を東北に敏速に送りこむとしたら、日本海を通じての輸送が考えられる。出羽の地まで海運で運び、その後のルートとして最上川を遡り、一部、陸送されて東北経営の中心地多賀城へ、あるいは秋田城がその河口に位置する雄物川を遡り、雄勝城への輸送が考えられる（図7）。

筆者は、桓武天皇は東北経営を考慮して、より日本海に近い平安京に遷都したが、遷都した同じ年に敵に大打撃を与えて戦乱は下火となった。このため西

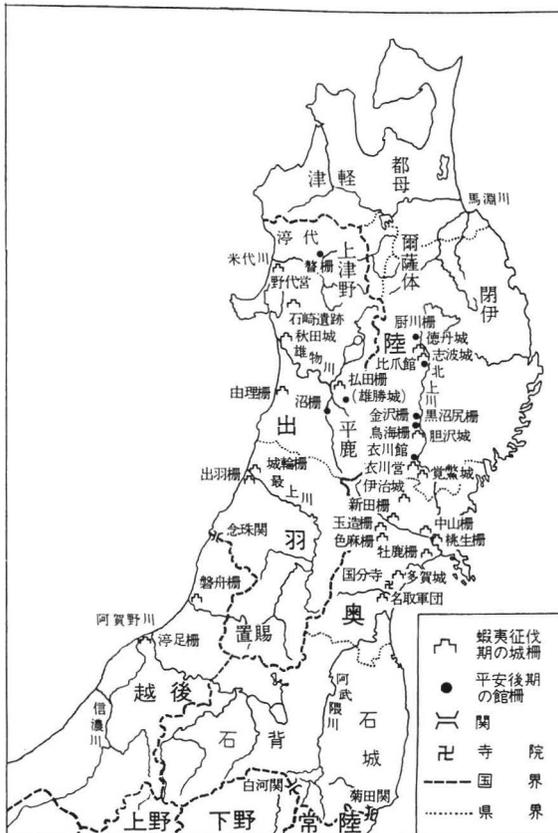


図7 東北の城柵分布と河川図

日本の物資の移送はしなくてよくなったのではないかと考えている。ちなみに戦勝の報が天皇の手元に届いたのは長岡京の廃都6日後であった。

なお日本海で古代から海運が盛んだったことは、近年、大いに注目されている。森浩一氏は、その港として今日では埋没あるいは干拓でその多くが消滅してしまった入江、潟が重要な役割を果たしたと指摘している。そして日本海では、古代の船による一日行程かそれ以内にあって相互に連動している多くの港の存在を指摘し、黒潮で洗われる太平洋と比べ海運にとっての有利性を主張している²²⁾。確かに日本海側には新三紀層あるいは洪積世の古砂丘、そして沖積世の新砂丘で遮られた潟がたくさん見られた。その多くは近世までに開拓されていったが、現在でも青森県の十三湖、鳥取県の湖山池など一部が残っている。内海である瀬戸内海と比べたらその条件は悪いであろうが、季節風が強く吹く冬を除いて、日本海は舟運にとって自然条件から有利だったのである。京都は琵琶湖を中継として、この日本海と強くつながるのである。

このように古代の盛んな日本海舟運を考えると、天智天皇6年(667)の大津京への遷都も重要な意義が察せられる。皇太子であった天智が中心となって蘇我入鹿を襲い、いわゆる大化の改新が行われたが、この当時、朝鮮半島は激動の時代であった。新羅が唐と結び、百濟、高句麗と敵しい緊張関係にあったのである。

この状況の中で日本は百濟と結び、朝鮮半島に三たび派兵した。しかし663年、白村江^{はくすきのえ}の戦いで唐・新羅連合軍に大敗し、百濟は滅亡して日本は半島から全面的に手を引くこととなった。さらに半島の南まで勢力圏に置いた唐・新羅連合軍の侵入を恐れ、太宰府に水城^{みづき}を築き、大野城^{おののき}(福岡県)、屋嶋城^{やしまき}(香川県)、高安城^{たかあのき}(奈良県)を築いて防備に努めた。この関連の中での遷都であるので、大津京の設置は唐・新羅連合軍の侵入に備えてのものだともいわれている²³⁾。

しかし九州、瀬戸内を通っての攻勢に対し、大和に比べて大津がいか程安全なのか理解しがたい。大阪湾から考えて、大津が一層危険とはいえないが、安全上、数段上とは納得しがたい。

筆者はこの遷都について、このような防禦ではなく、日本海を通じて高句麗との連けいを目的としていたのではなかったかと考えている。つまり日本は、唐・新羅連合軍と戦う中で彼らを共通の敵として高句麗とは良好な絆を築いていた。たとえば天智元年(662)、高句麗は日本に救援軍の派遣を求めている

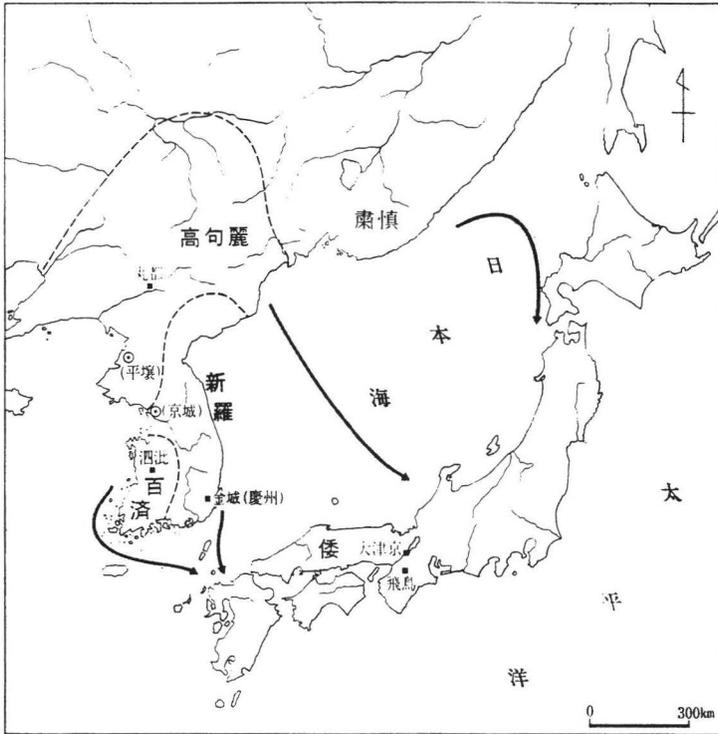


図8 古代の朝鮮半島三国から日本への渡航路推定図

出典：網野善彦他『海と列島文化第1巻—日本海と北国文化—』小学館 1990年 p. 197

が、そのルートは朝鮮半島北部から北陸への渡航であり、そこから琵琶湖を南下して畿内に入っていた。朝鮮半島南部を押さえられていた当時、大陸との連絡は北陸がその最前線だったのである。この緊張する外交関係の中で、日本海と身近な関係にある琵琶湖沿岸に都を置いたものとするのである。

しかし高句麗は、新羅の攻撃の前に668年に亡ぶ。その後、新羅は唐軍の朝鮮半島全域からの追い出しにかかり、671年、唐・新羅間で本格的な戦争が始まった。そして5年後には新羅は大同江以南の朝鮮半島の統一に成功したが、高句麗が滅亡した668年、唐との戦争に備えて新羅は日本に進調使を送り、日本に対して戦意のないことを明らかにした。高句麗が滅亡した後のこのような状況下で、大津に宮都を置く必要性もなくなり、壬申の乱で勝利した天武天皇

は再び都を大和に移したものと考えられるのである。

5. おわりに

河川を中心にして長岡京、平安京への遷都を考察した。その主要なことは、長岡京へは水陸交通の要衝への遷都であり、平安京へは長岡京の水害が直接的契機であったと考察した。また古代の著名な河川工事であり、和気清麻呂によって進められた大和川附替工事は、その重要な目的の中に長岡京の治水が入っていたのではないかと推測した。さらに平安京の位置について、琵琶湖を介して日本海とのつながりを考察した。

水陸交通の要衝へという長岡京遷都はさておき、本報告で論じた他の項目の多くについて文献的に実証することはなかなか困難である。しかし国土経営上首都が首都として成り立つため当然もっていなくてはならない物理的機能を考えていったなら、遷都の必要性、その目的も明らかになるだろうと考え、本報文をまとめていった次第である。考察した多くのことは仮説の域を出ないかもしれないが、古代史研究の発展に少しでも役立てば望外の慶びがある。また文献史学、考古学からのみではなく、国土の条件と技術を十分考慮した古代史の研究を期待するところである。

注釈・引用文献

- 1) 拙著「古代大和盆地における開発と河川処理」『水利科学 No. 151』水利科学研究所 1983年
または拙著「国土の開発と河川」鹿島出版会 1989年 pp. 13～37
- 2) 『続日本紀』延暦7年9月26日
- 3) 高橋美久二「長岡京と水陸の便」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会 三星出版 1992年 pp. 145～154
- 4) 「京都の歴史Ⅰ」京都市 昭和45年 学芸書林 p. 201
- 5) 「長岡京と水陸の便」前出
- 6) 吉崎伸「長岡京の廃都と巨椋池について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』前出 pp. 333～340
- 7) 「長岡京市史—資料編—」長岡京市史編さん委員会 長岡市役所 平成3年 p. 11
- 8) 「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史—資料編—』前出
- 9) 前掲1)
- 10) 小林清「長岡京の新研究」比叡書房 昭和50年 pp. 17～21

- 11) 小林清「長岡京の新研究」前出
- 12) 前掲6)
- 13) 「新修大阪市史」新修大阪市史編纂委員会 大阪市 pp. 90～93
- 14) 「新修大阪市史」前出 pp. 960～961
- 15) 「新修大阪市史」前出 pp. 954～955
- 16) 「新修大阪市史」前出 p. 858
- 17) 「新修大阪市史」前出 pp. 963～964
- 18) 前掲1)
- 19) 林屋他編「新修大津市史Ⅰ」大津市役所 昭和53年 p. 299
- 20) 「新修大津市史Ⅰ」前出 p. 295
- 21) 高橋富雄「東北の風土と歴史」山川出版社 昭和51年 pp. 55～58
- 22) 森浩一「潟と港を発掘する」『日本の古代 3』大林太良編 中央公論社 昭和61年
- 23) 早川庄八「東アジア外交と日本律令制の推移」『日本の古代15』岸俊男編 中央公論社

(建設省河川局水理調査官・工学博士)